

＜北海道熊研究会 会報＞ 第74号 2017年 7月 3日

北海道熊研究会事務局 北海道野生動物研究所内(Tel. 011-892-1057)

代表 門崎 允昭

事務局長 Peter Nichols ピーターニコルス氏

幹事長 藤田 弘志 氏

既報会報の1～73号はWebsiteに「北海道野生動物研究所」と入力しご覧下さい

ご意見ご連絡は本紙送信 email ではなく、下記の email へお願い致します

e-mail: kadosaki@pop21.odn.ne.jp

＜第8報：終報＞

ルシャ川・テッパンベツ川 両河口域での 3カ年間(2013年、2014年、2015年)の熊
U.arctos に関する調査報告 門崎 允昭・稗田 一俊・PETER NICHOLS

＜門崎の見解＞

① 大瀬さんの熊への考え対応は、理想的な考え対応策である。熊は理解力判断力記憶力推理力に長けた種であると、私は多様な知見から熊を見ている。人間の言葉も短一語は勿論、状況にもよるが、数語の連語も理解すると、私は自らの経験から、そう看取している。大瀬さんは簡単な語で、熊を叱るように諭すが、これは、熊に人の優位性を示し服従させるためである。私は、熊によく話し掛けるが、いずれも、普通の音声で穏やかに話す。その場で思う事だが、熊には、私の意志が通じていると、常に、感じている。

② 大瀬さんは、「番屋の近くに熊が来る事は認めるが、網の手入れを行っている側まで来てはだめだよ」と言う事。車道もその路床を「車が通行してきた場合」や「人が道路を歩いて来た場合は、熊は路床から立ち退きなさいよ」と言う事で、立ち抜かせる事を行っているが、この考えと手法は、共存法を確立する上での原点とすべき考えであり手法であると私は評価する。

③ 当該地の熊は大瀬手法の成果で、人や自動車の存在を、いち早く察知し、遭遇を避ける行動をしている。

④ 熊が居る場所を、人が使う場合には、大瀬手法で、ゴム弾などで、熊を追い払うのでは無く、熊に対し、正に一貫した手法言葉「ここに居たらだめだ、出て行け」で、熊と同所を共同で使う共存手法は(人間が使う場合は、熊に、その場から、退去して貰う)、熊の出没に悩んでいる地所の熊対策に、大いに導入すべきで有ると、我々は看取した。

＜既述外の熊の行動に関する知見＞

・9ヶ月令の子2頭が、母から150m程も離れ、先にテッパンベツ川に現れ、鮭を追いかけることを始めた。

・同じく他の9ヶ月令の子2頭は、母から離れても20mぐらいの、側に常に居た。

・ルシャの丸形の径1.8m程の、ボックスカルバートを、母が先に其の後2頭の9ヶ月令の子2頭が潜り通った。

・熊は個体により、それぞれ個性がある。

・4ヶ月令(6月上旬)の子熊から、成獣に至るまで、眺望をするために、立ち上がって、目線を高くする。

・道路は移動路として、徘徊、直進、横断をし、路面の窪地の水たまりでの水飲み、排糞

地（止まって排糞する場合と歩きながら排糞する場合とがる）として、また若齢個体の遊び場として利用されている。

・道路脇の林地（19号番屋の手前の林地(エゾマツとトドマツの径数 ϕ ~20cmの疎林)やポンベツ沢出合い付近の林地(ハンノキ、エゾマツとトドマツの径数 ϕ ~30cmの疎林)は熊が休息地として、利用している場合がある。

・ 鮭鱒が河川に遡上する前の、河川に鮭鱒が居ない時期の母子・若熊を主体とした熊達の食糧資源は、自生している草類・石を起こしてその下に生息している蟻類を捕食している。4ヶ月令の子熊も母熊のこの手法を真似し、蟻を採食している。海浜で石を起こしてその下に生息しているヨコエビ類を捕食している。4ヶ月令の子熊も母熊のこの手法を真似し、ヨコエビ類を採食している。海浜に打ち揚げられた藻類を食べている。

母子熊にとって当該地は、母熊が子熊に食べ物の種類やその採食法を伝授する場でもある。子は親の背中を見て育つのである。

<熊 *U. arctos* の鮭鱒の捕食生態>

当該地で観察し、得た知見は次の通りである。

<熊の鮭鱒の漁法>

当該地でよく見られた漁法は、下記の7法であった。

- ① 川中を四肢で歩きながら魚を見つけ狙い捕る。
- ② 川の浅瀬をバシバシ走り回り魚を浅瀬に追い立てて捕る。
- ③ 川中に後足で立ち上がって魚を見つけ狙い捕る。
- ④ 川中を四肢で歩きながら水中に目まで顔を入れて魚を見つけ狙い捕る。
- ⑤ 泳ぎながら魚を見つけ狙い捕る。
- ⑥ 岸辺で静止構えていて魚を見つけ飛び込み狙い捕る。
- ⑦ 岸辺を歩きながら魚を見つけ飛び込み狙い捕る。

<捕まえ方>

・魚を手と口を使って掴む。
・取り方は親、子（年齢・個体で）で異なる。8月になると、子（6ヶ月令）も漁をする。親が鮭採りが下手だと、子も下手である。

<食べ方>

・その場で喰う場合と他所に持って行って喰う場合とがある。
① 捕獲したその場で食べる。② 岸辺に上がって岸辺で食べる。③ 藪（安心できる場所）に持ち込んで食べる。
・残すのは、頭、尾、幽門垂である。カラス、カモメ類がこれを食いに寄る。
・鮭鱒の死体やその一部食い残した残骸を喰う場合もある。

<今後の課題>

今般得られた知見が、普遍的な事象か稀な事象かの検証と、さらなる知見事象の有無についての調査を、継続して行い、共存策の確かな手法の確立を図りたい。

<訂正> 本報69号で、熊はマルバトウキ *L.scoticum* を、食べないと書きましたが、私自身、熊が本種の茎葉や種子を食べる事を確認し、1987年版の「ヒグマ」道新発行に、茎葉、種を食べると記述しておりました。同様に、2009年刊行の「野生動物調査痕跡学図鑑」にも書いておりました。知床報告書を草稿した際、なぜか、忘れていました。 (了)